修士論文（要旨）
2015 年 1 月

青年期における協同作業認識と自己愛傾向の関連
-攻撃性の観点から-

指導教員　井上　直子　教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
213J4006
楠　和樹

Master’s Thesis（Abstract）
January 2015

The Association between Perceptions regarding Collaboration and Narcissistic Personality in University Students:From the Perspective of Aggression

Kazuki Kusunoki
213J4006
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Naoko Inoue

目次

1.　問題と目的 1
2.　方法 1
3.　結果と考察 1

引用文献

1. 問題と目的

自己愛とは，自分自身を愛することや，大切に思うことを意味している。近年，この自己愛の肥大化が指摘されており（福島,1992;小此木,1992），自分の自己愛を守るために，平気で他人を傷つけたり利用したりするような行動パターンや，あるいは自分自身の自己愛が傷つかないために，自己愛が傷つく可能性のある場面を避け，学校や社会から引きこもるような現象が増えている。このような，自己愛の高まりを迎える青年期後期（中山・中谷,2006; 小塩,1998,2004）の大学生が学ぶ教育現場において，能動的な学習を実施する1つの方法として，協同学習による授業づくりが注目を集めている（杉江ら,2004）。Cohen,Brody,Sapon-Shevin（2004）や Hapern（2000），Mandel（2003），Millis,＆Cottell（1998）によれば，協同学習とは，自分の学びと仲間の学びを最大限にするために共に学び合う学習方法であり，その有効性は数多く立証されている（ただし長濱・安永（2010）による）。こうした協同学習を行うためには，1 人 1 人が協同学習に積極的に貢献するという協同作業場面を創り出すことが前提となる（関田・安永,2005）。また，そうした場面に対して個人がどのような認識を持って臨んでいるかが重要である。

また近年の研究において，自己愛傾向と攻撃性との関連も注目されてきた（相良・相良,2006）。自己愛人格傾向について蛭田ら（2012）は，自己愛における過敏型と誇大型によって攻撃性のあり方が異なることも示唆している。協同作業と攻撃性の関連についての研究は，あまり見られないが，安立（2001）は，攻撃性において「積極的行動」が他者との距離のとり方に影響を与えると示唆している。協同作業を行う上で，人間関係をどのように行っていくかということは非常に重要な問題であり，そのことが協同作業認識大きな影響を与えることが考えられる。

本研究は，青年期後期の大学生を対象とし，自己愛傾向を，自己愛傾向全体の高低と注目賞賛欲求−主張欲求の優位性の 2 成分による 4 類型に分類し，それぞれの類型が，自分や他者に対してどのような攻撃性の特徴を示し，協同作業に対する認識とどのように関連しているかを検討することを目的とする。

青年期後期の大学生にとって，他者との協同作業をどのように捉えているかは，今後の社会適応を考えるうえで重要である。協同作業認識を，この時期に高まる自己愛傾向における攻撃性との関連で検討することは，協同作業・学習を促進することに繋がる有益な示唆を与える一助となると考える。

2. 方法

都内某私立大学に在籍する 18～24 歳の大学生，男女 505 名を調査対象とした。調査は，2014 年 7 月～8 月の期間に実施した。調査用紙の項目は「フェイスシート」，「自己愛人格目録短縮版（NPI-S）尺度（小塩,1998）」，「協同作業認識尺度(長濱ら,2009)」，「攻撃性質問紙(安立,2001)」であった。

3. 結果と考察

本研究では，協同作業に肯定的な認識を持っているものは，適応的な攻撃性である「積極的

行動」が高くなり，協同作業に否定的な認識を持っているものは，「対象破壊行動」「積極的行動」「自責感」「自己破壊行動」「猜疑心」などの破壊的な攻撃が高くなることが示唆された。また，自己愛の高さが協同作業認識に良い効果をもたらすことが考えられ，自己愛の高いものは，攻撃性における「積極的行動」が高いことから，協同作業に対して良い認識を持つことが示唆された。自己愛は，一般に病理的なものとして考えられることが多いが，本研究では自己愛傾向の適応的な面が現れたことが考えられる。

また，同じ自己愛が高いものの中でも，注目優位のものと主張優位のもので，協同作業に対する認識は，異なる結果となった。注目優位のものは，周囲の評価を気にしつつも，適応的で能動的な行動を行うことが出来ていることが考えられ，主張優位のものは，一見他者の評価に無頓着で他責的でありながら，内面的には周囲の評価を気にしており，適応的で能動的な行動を行うことが出来ずにいることが考えられる。

本研究では，自己愛のタイプにより協同作業の認識は異なっていることが示され，協同作業の肯定的な認識と自己愛の高さのいずれにも「積極的行動」が重要な役割を果たしていることが示唆された。

引用文献

安立奈歩 (2001) . 攻撃性の諸相に関する研究　京都大学大学院教育研究科紀要 **47**,475－485.

福島　章　（1992）．　青年期の心　講談社.

Fromm,E （1956）. The Art of Loving. Harper＆Brothers. （鈴木 晶（訳）（1991）．　愛するということ　紀伊国屋書店）

蛭田陽子・田名場　忍　(2012).　自己愛傾向と外向・内向攻撃性との関連――無関心型および過敏型自己愛傾向に着目して　弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要,　**9**, 18－30.

長濱文与・安永　悟・関田一彦・甲原　定房　（2009）. 協同作業認識尺度の開発　教育心理学研究,　**57**,　24－37.

長濱文与・安永　悟　（2010）．　大学生の協同作業に対する認識の変化――対話中心授業と講義中心授業を対象に　人間関係研究,　**9**,　35－42.

中山留美子・中谷素之　（2006）．　青年期における自己愛の構造と発達的変化の検討　教育心理学研, **54**, 188－198.

小此木　啓吾　（1992）．　自己愛人間　ちくま学芸文庫.

小塩真司　（1998）．　自己愛傾向に関する一研究――性役割との関連　名古屋大学教育学部紀要（心理学）, **45** , 45－53.

小塩真司　（2004）．　自己愛傾向と大学生活不安の関連　人文学部研究論集（中部大学）, **12**, 67－78.

小塩真司・小平英志　（2005）．　自己愛傾向と理想自己――理想自己の記述に注目して 人文学部研究論集, **13**, 37-54.

Raskin, R.,　&　Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *The Psychologiacl Reports*, **45**, 590.

相良陽一郎・相良麻里　（2006）．　自己愛と攻撃性の関連について 千葉商大紀要 **43**, 37-59.

杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅ほなみ　（2004）．　大学授業を活性化する方法　玉川大学出版.

関田一彦・安田　悟　（2005）. 協同学習の定義と関連用語の整理　協同と教育,　**1**,　10－17